

オープンアクセス出版の動向

杉田茂樹(小樽商科大学)
<ssugita@office.otaru-uc.ac.jp>
国立大学図書館協会学術情報流通セミナー
平成25年1月24日 東京大学

はじめに:オープンアクセス思潮

- 学術は人類の共有資産
 - 「学術出版転覆提案」スティーブン・ハーナッド(1994)
 - SPARCの活動(1998-)「研究を研究者の手に取り戻せ」
 - ブダペストオープンアクセスイニシャチブ(BOAI)(2001-2002)
 - BOAI-1(**Green OA**) セルフアーカイビング
 - BOAI-2(**Gold OA**) オープンアクセスジャーナル
 - オープンアクセス出版に関するベセスダ声明(2003)
 - 自然・人文科学におけるオープンアクセスに関するベルリン宣言(2003)

(承前)

- よく援用される論拠:パブリックアクセス論
 - 公的資金が投じられた研究成果の納税者への還元
 - NIH(米国国立衛生研究所)によるPMCへのセルフアーカイブ義務化など
- BOAI-10 “setting the default to open”(2012)
 - 10年間のOAの進展を踏まえた具体的な提言
 - 大学の研究成果公開方針、研究助成方針への実装
 - 再頒布、再利用等を含むライセンス拡張(CC-BY推奨)
 - 基盤整備(Green/Gold、相互運用性確保、識別子体系、リンクング、論文レベル評価など)
 - 社会的環境整備、理解増進

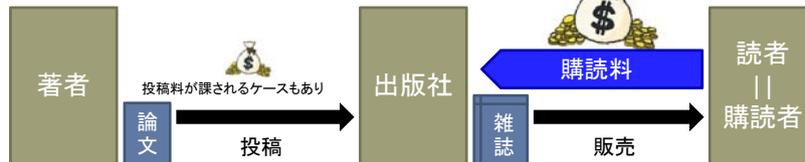
オープンアクセスジャーナル

- 約8,500種(DOAJによる)
- 三根(2007)による5類型
 - 完全無料
 - 著者支払・読者無料
 - ハイブリッド型
 - 通常の有料電子ジャーナルのうち、選択OAオプションを持つもの。
→著者が所定の料金を支払った論文のみが、電子ジャーナル上でアクセス制限を解除され、無料公開となる。
 - バックナンバーのみ無料公開(HighWireなど)
 - 電子版のみ無料公開(Hindawiなど)

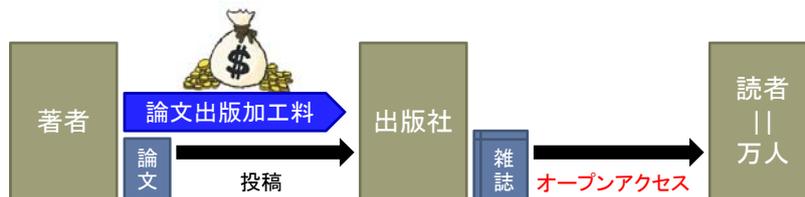


Article Processing Charge (APC) (論文出版加工料)

- 従来の購読型ジャーナル



- 著者支払い・読者無料型OAジャーナル



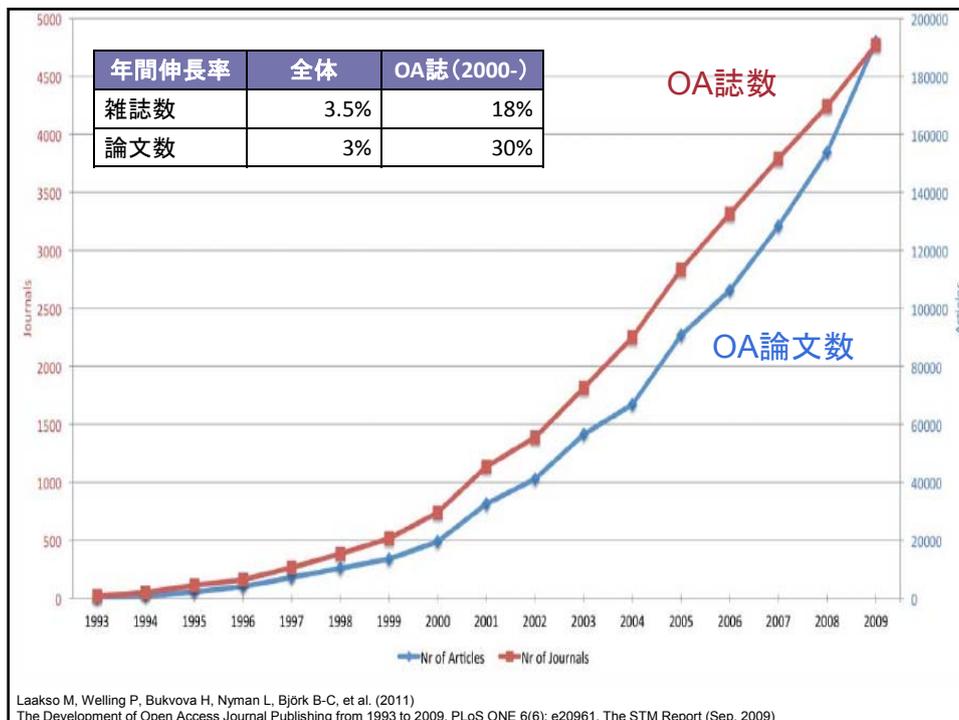
代表的なオープンアクセス出版団体

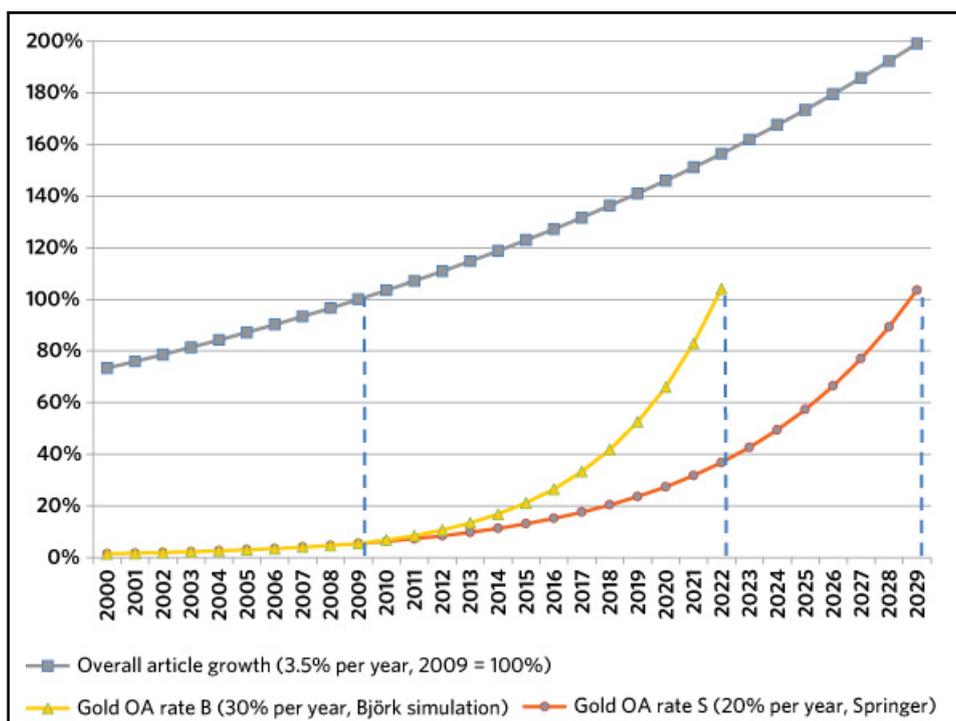
- BioMed Central
 - 自然科学系241誌を電子出版
 - 1999年構想発表、2002年APC徴収開始
 - 2008年、Springerが買収
- PUBLIC LIBRARY of SCIENCE (PLoS)
 - 2001年設立
 - 自然科学系7誌を電子出版
 - APC: 1,350～2,900ドル
 - 他社優良誌にひけをとらない品質
 - PLoS Biology (2003-) : IF(2009)=12.916



主要出版者のAPC一覧

Publisher	APC	Publisher	APC
BMC	\$1665-\$1905	Selected Nature Journals	\$3000-\$3900
American Chemical Society	\$3000	Nature Communications	\$5000
BMJ	\$3930	PLoS	\$1350-\$2900
BMJ Open	\$1885	Springer OpenChoice	\$3000
Elsevier	\$3000-\$5000	SpringerPlus	\$1085
Hindawi	\$300-\$1500	Wiley-Blackwell Online Open	\$3000

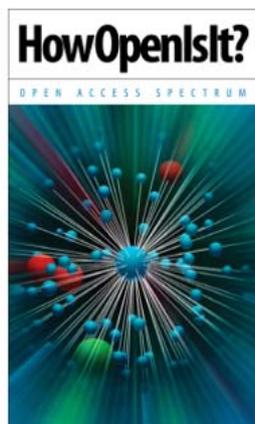




オープンアクセス学術出版協会

- Open Access Scholarly Publishers Association
- 2008年10月設立、80の出版団体等が加盟
 - OA Professional Publishing Organizations: 29
 - PLoS, Biomed Central, Wiley, Springer, AIP, APSなど
 - OA Scientist/Scholar Publishers: 12
 - Other Organizations with Voting Privileges: 9
 - SPARC Europe, California Digital Libraryなど
 - Associate Members: 30
- 世界中のOA出版団体の意志を代表する
 - 情報共有、標準技術の確立、先進的モデル形成、アドヴォカシー、教育、イノベーション促進

How Open Is It?



- SPARC、PLoS、OASPA (2012)
 - 読者の権利
 - 購読課金の有無など
 - 再利用の権利
 - 複製権
 - 著者自身による公表の権利
 - 自動的転載手段の提供
 - 機械可読性

新たなコンセプトのオープンアクセス出版①

PLoS ONE (2006-)

- “オープンアクセスメガジャーナル”
 - 14,000報/年(2011)、25,000報/年(2012予測)
 - APC: 1350ドル
 - PLoSの財政向上の原動力
 - 査読では科学的正当性のみを審査 (質は保証するが価値は保証しない)
 - 「評価は出版後にされるべき」
→論文単位統計(Article Level Metrics)
- クローン誌、亜種続々
 - Scientific Reports (NPGが出版)
 - SpringerPlus (規模が2000本と大きい、APCが安い(\$1,000))
 - The Scientific World Journal (購読モデル→Hindawiが買収、OA化。IFあり)
 - SAGE Open (社会科学分野。APCが安い(\$695))
- 「数年のうちに、数々のメガジャーナルがPLoS ONEのような成功を遂げる。そして、世界中の研究論文が、相当の割合でそこに集中する。うまくいけば、メガジャーナルは、学術雑誌オープンアクセス化の最強最速のモデルとなるのではないだろうか」(Peter Binfield出版代表(当時)から『月刊DRF』読者へのメッセージ)



新たなコンセプトのオープンアクセス出版②

eLife (2012-)

- 研究助成団体等が出版を助成 (英 Wellcome / 米 HHMI / 独 MP)
- “OA journal for **the very best** in life science and biomedical”
- 当面 APC なし → 大学の研究機能の喪失？
 - 研究者は研究助成団体によって評価 + 資金助成される
 - 研究成果の流通は当面無料 (購読料も投稿料も要さない)
 - 「つまり、給料は大学からでている。大学は教員に教育を要求している。『研究したいなら外部資金でやりなさい。ただし、研究は給料で買っている時間の一部を使っています』ということになります」(土屋先生談)
- 「Journal of Our Grantees」との揶揄あり
→ It kills the Journal. (Mark Patterson)
- 当初は出版プラットフォームとして HighWire を想定 → PMC での出版に変更

新たなコンセプトのオープンアクセス出版③

PeerJ (2012-)

- 会員制「生涯99ドル」
 - すべての共著者が会員である必要あり (ただし12名まで)
 - 「入会金だけとって全リジェクトの恐れは？」 → アカデミックエディタは独立
 - 最低年1回の査読要請 (拒否すると会員権停止 (\$99で再開))
 - Institutional discount あり
- Peter Binfield (PLoS ONE) + Jason Hoyt (Mendeley)
- 査読論文の公表 (PeerJ) とプレプリント共有 (PeerJ PrePrints) の場
- 査読方針: PLoS ONE と同様の軽量査読

	Basic Plan	Enhanced Plan ("most popular")	Investigator Plan
事前入会	\$99	\$199	\$299
(査読通過後入会)	\$129	\$239	\$349
PeerJ	1	2	無制限
PeerJ PrePrints (Public)	無制限	無制限	無制限
PeerJ PrePrints (Private)	1	無制限	無制限
主ターゲット	大学院生	ポスドク	ラボ長や多作家

Remember that a society would publish a journal with articles from its members; members that paid a membership to support the society and its journal? So deep in its core, does it mean that PeerJ is simply a scientific society, charging its members for the service of publishing? I think it is. And I think it is a great idea.

- Eduardo Santos "PeerJ: are we reinventing the wheel?" (Monday, 16 July 2012)
<http://sparrow.otago.ac.nz/index.php/blog/34-general/141-peerj-are-we-reinventing-the-wheel>

新たなコンセプトのオープンアクセス出版④

Social Sciences Directory (2012-)

- 社会科学系、PLoS ONEと同様の軽量査読
- 破格のAPC(100ポンド)
- 機関メンバーシップ制度(2,000ポンド)
 - 所属教員は1年間投稿し放題
 - 理系の普通のAPCモデル出版であれば1編の価格相当
 - ノッティンガム大学が世界初の機関会員契約
 - 「ノッティンガム大学は雑誌の品質でなく雑誌のビジネスモデルによって論文投稿先を選択するのか」との批判あり
- サブミッション時にAPC課金
- 姉妹誌 Humanities Directory

The screenshot shows the 'Scholarly Open Access' website. The main heading is 'Scholarly Open Access' with the subtitle 'Critical analysis of scholarly open-access publishing'. A navigation bar includes links for Home, About the Author, Disclaimer, Individual Journals, List of Publishers, and Research. The 'List of Publishers' section is active, featuring a search box and a 'Beall's List' section. The 'Beall's List' section is titled 'Potential, possible, or probable predatory scholarly open-access publishers'. The word 'predatory' in this title is circled in red. Below the title, there is a paragraph of text and a list of links. A red box highlights the word 'Adjective' and its definition: 'predatory (comparative more predatory, superlative most predatory)'. The definition includes three points: 1. Of, or relating to a predator. 2. Living by preying on other living animals. 3. (figuratively) Exploiting or victimizing others for personal gain. To the right of the main content, there are sections for 'RECENT POSTS' and 'ARCHIVES'.

カスケード査読

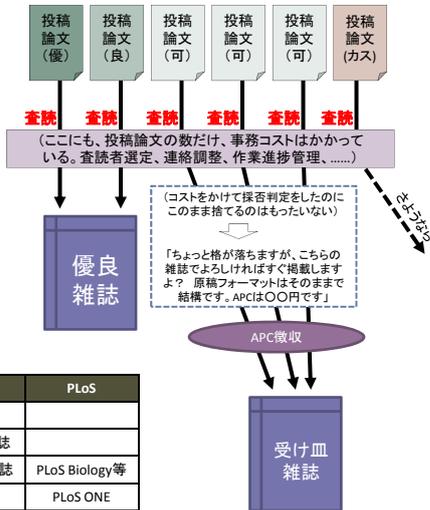
「他の Nature、Nature 姉妹誌で論文原稿が不受理となった場合、著者は、論文原稿の自動転送サービスを利用して、原稿をNature Communications に投稿することができます。(中略)Nature Communications のエディターは、編集上の決定を行う際に、以前の査読結果を考慮に入れますが、さらに別の査読者から助言を受ける場合もあります。なお、著者は、新たな査読を要求することもできます」

-Nature Communications (NPG)

※さらには、出版者を越えたカスケード査読も。



(神経科学分野40誌による「神経科学ピアレビューコンソーシアム」)

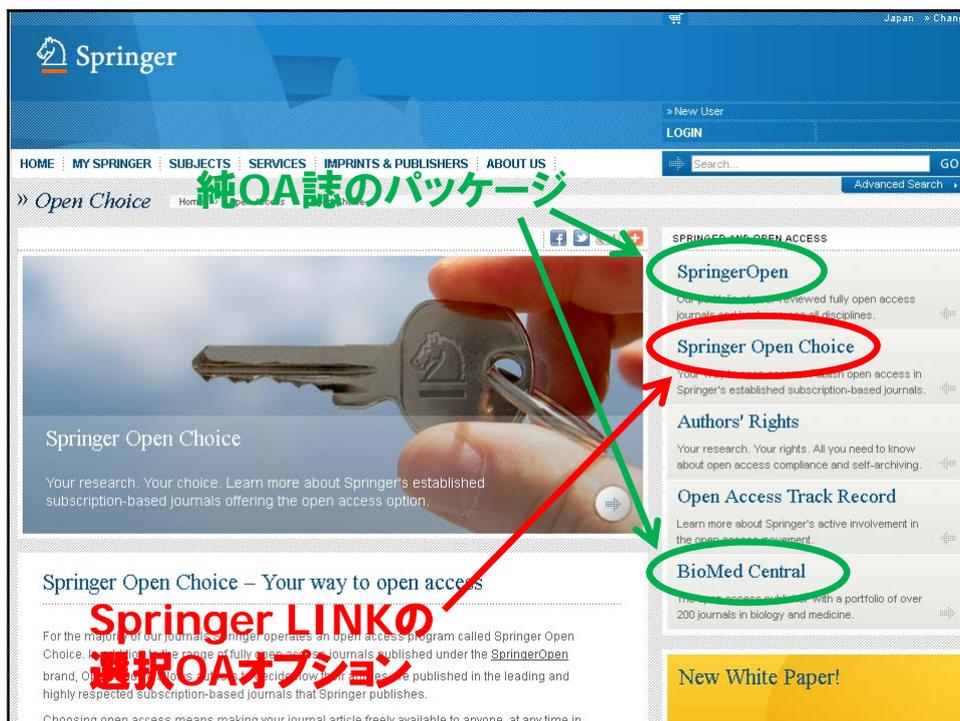


	NPG	Springer	PLoS
購読モデル誌	Nature本誌等		
購読モデル誌(ハイブリッド)	Nature Comm.等	SpringerLINK各誌	
オープンアクセス誌	Mol. System Biol.等	SpringerOpen各誌	PLoS Biology等
メガジャーナル等	Scientific Reports	SpringerPlus	PLoS ONE

商業出版社の戦略推移例: Springer

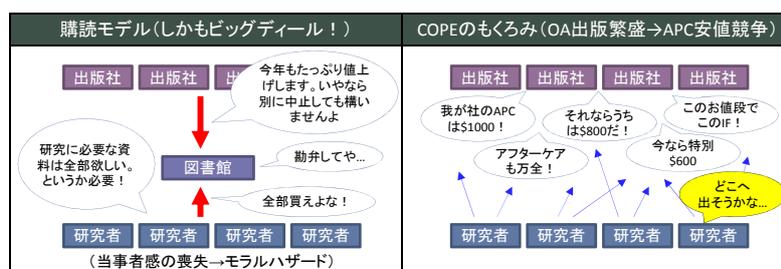
- 既成誌のハイブリッド化
- 「SpringerLINK購読+全Open Choice」包括契約
 - 所属研究者のAPCを大学・研究機関が一括負担 (MPG、UC、ゲッティンゲン大学、中国科学院など)
- BioMed Central買収(2008)
- SpringerOpen(2011)48誌を創刊
 - 購読モデルパッケージ(SpringerLINK)は温存
- SpringerPlus(2012)
 - カスケード査読の受け皿





「オープンアクセス出版支援協定」

- Compact for Open-Access Publishing Equity
 - 北米を中心とした17の大学・研究機関(2009-)
 - APC費用の支援などにより、OA誌への投稿を促進
 - (将来的に)APC設定等における**市場原理の作動**を期待





Finchレポートを巡る攻防



- 英国政府への審議会答申「Finchレポート」(2012)
 - オープンアクセスへの移行に向けての10項目の提言
 - OA誌ないしハイブリッド誌、APC支援、再利用、購読アクセス普遍化、公立図書館、地方自治体、ポストビッグディール、モノグラフ、大学/助成機関/出版社/学会の協働、IR/SRIは研究データと灰色文献のOAと保存、購読型ジャーナル保護
- RCUK(英国研究会議(研究助成団体))の新方針
 - 助成研究の成果論文は次のような雑誌に投稿せよ
 1. OA誌またはOAオプションのある有料誌
 2. もしくは、6~12カ月以内に、著者稿のリポジトリ公開を認める雑誌
- **embargoの長期化とハイブリッド誌化の温床**
 - “Good business. Thanks to Finch and RCUK.” (Stevan Harnad)
- 英国政府、1,700万ポンド(2013)の資金投下を決定

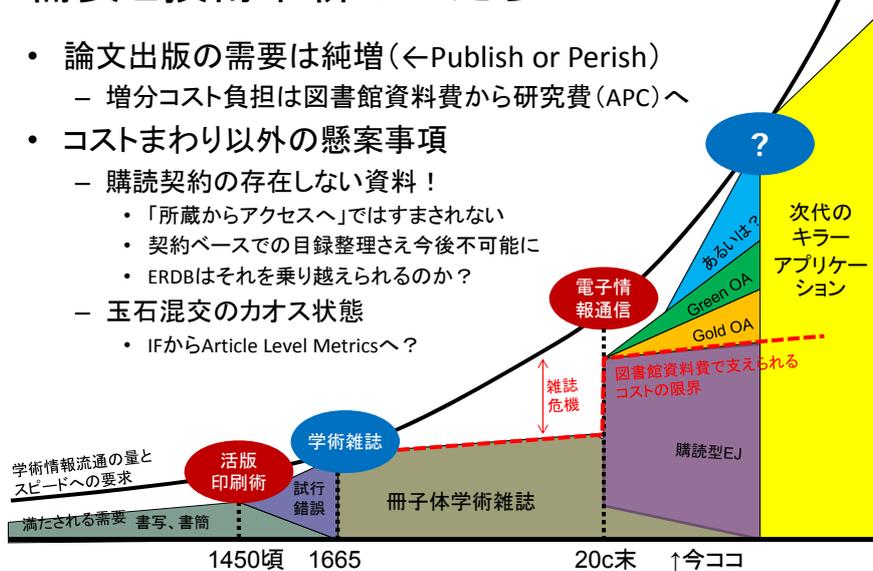
参考文献・ウェブサイト等

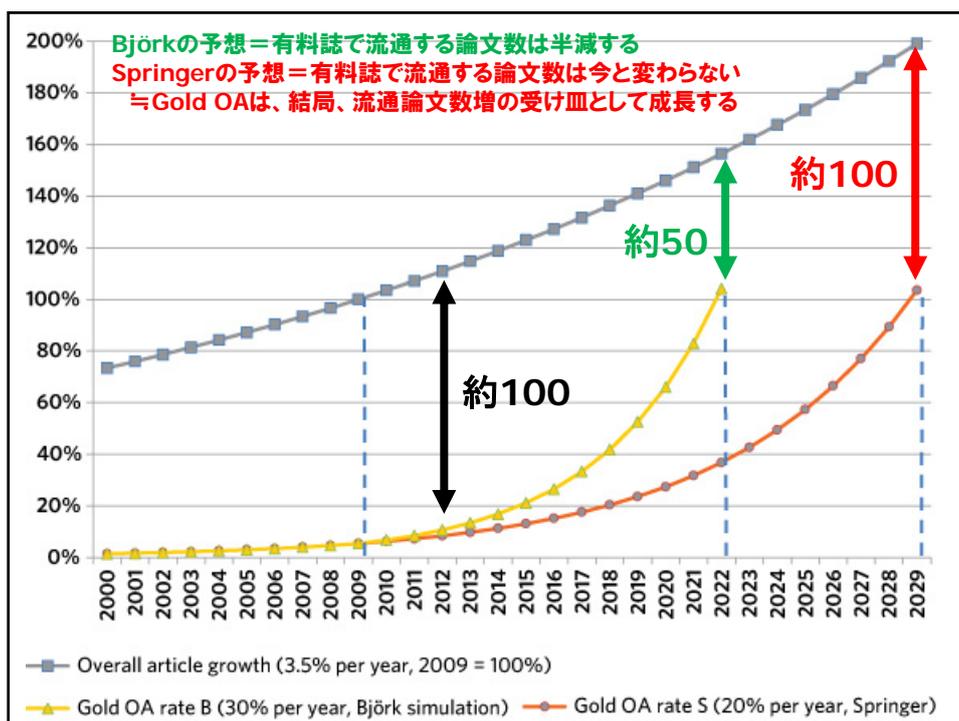
- 学術出版転覆提案 <http://www.arl.org/sc/subversive/i-overture-the-subversive-proposal.shtml>
- 同日本語版 <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?plugin=attach&refer=Foreign%20Documents&openfile=TheSubversiveProposal.pdf>
- SPARC <http://www.arl.org/sparc/>
- SPARC Europe <http://sparceurope.org/>
- SPARC Japan <http://www.nii.ac.jp/sparc/>
- ブダベストオープンアクセスイニシアチブ <http://www.opensocietyfoundations.org/openaccess>
- オープンアクセス出版に関するベセスダ声明 <http://www.earlham.edu/~peters/fos/bethesda.htm>
- 自然・人文科学におけるオープンアクセスに関するベルリン宣言 <http://oa.mpg.de/lang/en-uk/berlin-prozess/berliner-erklarung/>
- NIHパブリックアクセス方針 <http://publicaccess.nih.gov/>
- BOAI-10 <http://www.opensocietyfoundations.org/openaccess/boai-10-recommendations>
- DOAJ (Directory of Open Access Journals) <http://www.doaj.org/>
- OASPA (オープンアクセス学術出版協会) <http://oaspa.org/>
- How Open Is It? <http://www.plos.org/about/open-access/howopenisit/>
- PUBLIC LIBRARY of SCIENCE <http://www.plos.org/>
- Compact for Open-Access Publishing Equity <http://www.oacompact.org/>
- PLoS ONE <http://www.plosone.org/>
- eLife <http://www.elifesciences.org/>
- PeerJ <https://peerj.com/>
- プレデター出版社リスト <http://scholarlyoa.com/publishers/>
- Nature Communicationsの原稿転送サービス <http://www.natureasia.com/ja-jp/ncomms/guide-to-authors>
- Neuroscience Peer Review Consortium <http://nprc.incf.org/>
- SpringerOpen <http://www.springeropen.com/>
- SpringerPlus <http://www.springerplus.com/>
- BioMed Central <http://www.biomedcentral.com/>
- Finchレポート <http://www.researchinfonet.org/publish/finch/>
- RCUKの新方針 <http://www.rcuk.ac.uk/media/news/2012news/Pages/120716.aspx>
- RCUK announces block grants for universities to aid drives to open access to research outputs <http://www.rcuk.ac.uk/media/news/2012news/Pages/121108.aspx>

以下、私的印象

学術情報流通の量とスピードに対する、 需要と技術革新のいたちごっこ

- 論文出版の需要は純増(←Publish or Perish)
 - 増分コスト負担は図書館資料費から研究費(APC)へ
- コストまわり以外の懸案事項
 - 購読契約の存在しない資料!
 - 「所蔵からアクセスへ」ではすまされない
 - 契約ベースでの目録整理さえ今後不可能に
 - ERDBはそれを乗り越えられるのか?
 - 玉石混交のカオス状態
 - IFからArticle Level Metricsへ?





図書館業務へのインパクト

冊子体	有料電子ジャーナル	有料電子ジャーナル (ビッグディール)	OAジャーナル
選定	選定	選定	選定
契約	契約	契約	契約
目録	目録	目録	目録
受入	受入	受入	受入
支払	支払	支払	支払
供用	供用	供用	供用
ILL対応	ILL対応	ILL対応	ILL対応
製本	製本	製本	製本
保存	保存	保存	保存

APC関連事務?

学術雑誌受容における 大学図書館の役割の変化

- 紙出版時代
 - 来館利用(図書館=受容の拠点)
- 電子ジャーナル黎明期(選択購読の時代) 「雑誌危機」
 - 図書館不要、ただしそこには「品揃え」だけはあった
- ビッグディール
 - 「雑誌危機」の鮮やかな解決、劇的な利便性向上
 - **学術情報流通の frontline からの、大学図書館の退場**
 - 大規模一括契約の単なる事務担当部局へ
 - オール・オア・ナッシングの綱渡り 第2の「雑誌危機」?
- OAジャーナルの台頭
 - 図書館資料費の外でのコスト回収 新たな先行き不透明感

論点

- 出版社にとって、(頭打ちの図書館資料費に比べて) **教員研究費は青天井の狩場**
- しかしまた **有料電子ジャーナルもこのまま残るに違いない**
 - 頭打ちとは言え、取れてるパイを手放すわけがない
 - (とくに現在の英国で表面化してきた)懸念は、オープンアクセス義務化方針に呼応して、ハイブリッドの **二重払い**が増すこと
- APCの **価格交渉努力**をする？
 - 平均APC2,500ドルで全てが著者負担OAになった場合
 - 年間3,000論文×2,500ドル=約6億円(←購読料より安い?)
- APCの **支払代行、全容把握・管理**をする？
 - 1インボイスに対し、1時間の処理時間(英OAIG推定)
 - 年間3,000論文÷250営業日=1日12論文の処理が必要=1.5FTE
 - 共通経費化? → **当事者意識**の喪失 → モラルハザード

「積極的に絡んで欲しい」

Gold OAIになると図書館はもういないのでは、という話があった。私はSCOAP3でOAIにも関わっているが、ぜひとも図書館にはAPCをとりまとめる機能を持って欲しい。おそらく大手の数少ない出版社が牛耳るようになるとRichardsonさんの話にもあった。例えばAPCの交渉を、値引き交渉等を、これまで購読料の交渉をされていたかわりにやる窓口になってくれることを図書館には期待している。ぜひ、いらなくなって言わないで積極的に絡んで欲しい。

現在はOAが多数ではないので研究者も気づいていない。OAになると、読者としての格差は完全になくなるが、投稿者にすれば研究費がなくて投稿できない、良い雑誌に出すにはAPCが高くて・・・という、そこでの貧富の格差が生じる。それがあってはいけない。そこを是非、大学／図書館が格差を縮める方向に動いて欲しい。今の段階では個別支払いなので気づいていないが、主流になったらきっと変わる。

(第6回SPARC Japanセミナー「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わるのか」(平成24年12月4日)に参加の研究者からの発言。ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」による)

